

## カザフスタン人日本語学習者の外国語学習観：ロシアとの比較から

久木元, 恵  
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494690>

---

出版情報：比較社会文化研究. 25, pp.27-35, 2009-02-20. 九州大学大学院比較社会文化研究科  
バージョン：  
権利関係：

# カザフスタン人日本語学習者の外国語学習観

— ロシアとの比較から —

クキモト  
久木元

メグミ  
恵

## 1. はじめに

本研究は日本語学習者の言語学習観に関する考察を行ったものである。中でも日本人との接触が少なく、日本語学習をすることによって将来就職に役に立つといったことを学習動機とするいわゆる「道具的動機」<sup>1</sup>になりにくいと言われる地における日本語教育の現場、なおかつ第三言語として日本語を学ぶ学習者に焦点を当て、カザフスタンの日本語学習者を調査対象とした。

カザフスタンは1991年に旧ソビエトからの解体により独立を果たし、国家語をカザフ語、公用語をロシア語とする。そのためカザフスタンの人々はほぼバイリンガル<sup>2</sup>である。カザフ語は日本語や韓国語と同様に格助詞を持つ膠着語であるのに対し、ロシア語は動詞や名詞を活用させ格を表す屈折語である。カザフスタンの学校教育では、ほとんどが学生の第一言語によってカザフ語クラスとロシア語クラスに分け授業を行う。大学教育も同様で、同じ専攻であっても異なる言語で教授が行われているのである。

本研究で対象とするのは、こうした言語背景を持つ学習者がどのような外国語学習観を持っているのかについて考察したものである。

## 2. カザフスタンにおける日本語教育

筆者は2006年6月から2年間、カザフスタン共和国アルマティ市にて日本語教育に従事した。そこで把握した問題点を概観し、本研究の背景としたい(久木元、2008)。

カザフスタンの日本語教育の始まりは、独立直後の1991年で、アル・ファラビ名称カザフ民族大学<sup>3</sup>での日本語講座開設にさかのぼる。以後、日本語学習者は緩やかな増加を見せ、2007年末の調査では延べ約1,255名となっている。機関数は、高等教育機関7、初・中等教育機関4、一般向け講座1である。新たな動向としては、2007年秋にはカザフ民族大学にて、国内で最初の日本語を専門とする大学院修士課程が設立されている。日本語教育の開始から16年目で日本語の修士号がまもなく誕生しようとしている。

このように緩やかな成長を見せる一方で、カザフスタン

における日本語教育は、いくつかの課題も抱えている。まず、日本語を学習してもそれを活かす場がない。これは、両国政治的関係<sup>4</sup>に起因する。日本とカザフスタンの関係は、2006年は小泉前首相のカザフスタン来訪、2008年の今年にはナザルバエフ大統領の訪日もあり、徐々に緊密になっている発展段階であると言える。カザフスタン側から見ると、アニメーションや日本食レストランといった日本文化が一般に広まり、それらが日本語学習の動機付けになりつつある。カザフスタン人にとって日本は地理的にも心的にも遠い国という感覚は少しずつ変化している。

反面、日本人が商用以外でカザフスタンを訪れることはほとんどないという側面もある(荒川・和栗、2007)。その理由は、カザフスタンの観光資源がそれほど豊かではないことが最大の原因であろう。隣国ウズベキスタンは世界文化遺産を数多く有しているため、日本語学習後、観光ガイドとして職を得ることができる(福島、2006)。それに対して、カザフスタンの世界遺産の数はウズベキスタンの半分以下で、職業としての観光ガイドは今のところ非常に少ない。加えて、カザフスタン入国の際、煩雑なビザ取得にかかる手続きが必要であり、このことも日本人観光客増加の伸び悩みに拍車をかけていると考えられる。こうしたことから、日本人向け観光ガイドは今のところそれほど需要がなく、ホテルやレストラン従業員の日本語も求められない。つまり、カザフスタン人の目は徐々に日本に向かいつつあるが、日本人はそれほどカザフスタンへの関心が高まっているとは言えない、一方通行の状態に陥っているというのが現状であると言えるだろう。

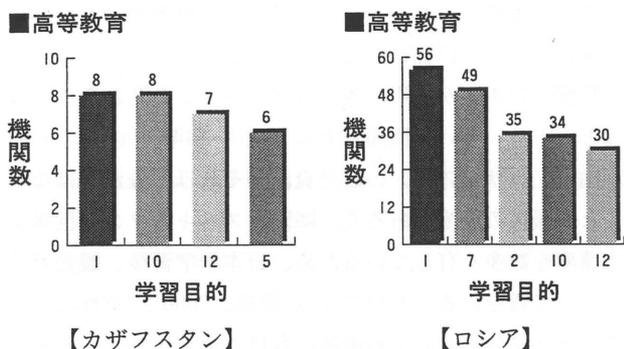
さらに、日本企業においては、業務が英語で行われるのが通常であるため、日本語ができる従業員よりは英語ができるの方が求められているのが現状である。そのため、日本語学習者にとっては、せっかく勉強した日本語を生かす場が少ない。

こうした背景により、カザフスタンにおける日本語学習者の学習動機が道具的動機になりえない状況が続いている。

### 3. 先行研究および研究課題

木谷 (1999) はロシア極東地域の大学生 (ウラジオストク極東国立総合大学、ユジノサハリンスク国立教育大学、ハバロフスク国立教育大学) 日本語学習者を対象に言語学習観についての調査を行った。木谷(1999)では、(1)コミュニケーション重視の教室活動にも積極的に参加できる可能性が感じられる、(2)文法や翻訳の学習が言語学習の最重要部分だと考える傾向が強く「話す」より「読む・書く」の方が易しいと感じている傾向が見られる、(3)間違いや誤りに対する寛容度は比較的高い、といった結果が出されている。

さて、ロシア極東地域とカザフスタンの異なる点のひとつに学習者がバイリンガルかモノリンガルかという点がある<sup>5</sup>。ロシア極東では、ロシア語のみが話されているのに対し、カザフスタンではロシア語とカザフ語を併用する。



- 凡例:
- 1 日本の文化に関する知識を得るため
  - 2 日本の政治・経済・社会に関する知識を得るため
  - 5 日本に留学するため
  - 7 将来の就職のため
  - 10 日本語によるコミュニケーションができるようになるため
  - 12 日本語という言語そのものへの興味

図1 両国日本語学習者の学習目的 (2006年調査; 国際交流基金<sup>6</sup>)

また、JFL環境で木谷(1999)のロシア極東地域とカザフスタンとは学習動機が比較的類似する。ロシア極東地域においては、日本との地理的距離は近いものの日本語を学習することによって観光ガイド、日系企業などの就職の機会を得られるといったメリットはあるものの少ないという。こうした学習環境と対照的なのが、たとえばフィリピンがある。フィリピンは観光資源に恵まれ日本語ガイドなどの職を得ることも可能である、つまり道具的動機になりうると述べられている。このように、同じJFL環境といっても、日本語を学ぶことによって直接の収入につながるような場所とそうではない場所がある。カザフスタンとロシア

アは前者であり、フィリピンは後者であると言えるのではないか。

また言語的背景としては、ロシアではロシア語のみが用いられているのに対し、フィリピンにおいては国家語がフィリピン語、公用語が英語である(片桐、2005)。従ってフィリピンおよびカザフスタンの言語背景は同様であると言え、多くの学習者にとって日本語が第三言語となる。付け加えて、カザフスタンの人々は子どもの頃、家庭や学校でロシア語を教えられることから、臨界期以前に第二言語を習得している者が大多数であることも述べておく。

これらをまとめると、表1のようになる;

表1 JFL環境の日本語学習背景

	道具的動機になりうる	第三言語としての日本語
カザフスタン	-	+
ロシア	-	-
(フィリピン)	+	+

日本語学習背景が各々の事情で異なる学習者がどのような外国語学習観を持っているか明らかにするべく、本研究では木谷(1999)で用いられた調査紙を使用した。この調査紙はBALLI<sup>7</sup>を元に作成されている。木谷(1999)では、調査紙が図1の5つのカテゴリーに分類されている。

本研究の研究課題を次の点とし、考察を行う;

- ・道具的動機になりうる可能性の低い地域における学習者の中で、第三言語学習者は言語習得の適正をどう捉えているか
- ・第二言語としての日本語を学ぶロシアとの相違点はあるか

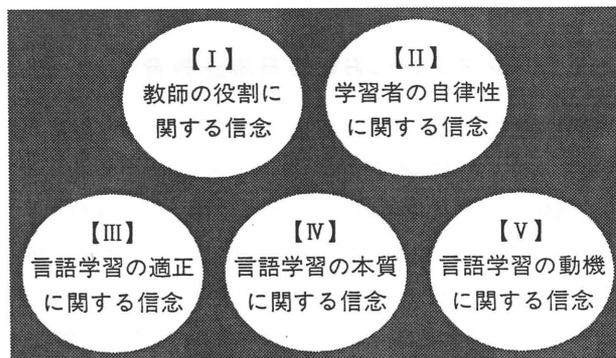


図2 言語学習観の5つのカテゴリー

主に予想されるのは、第三言語として日本語を学ぶカザフスタンの学習者は、どのように言語を学ぶのかを知っており、どんな人が言語学習を得意とするかということを経験から知っていると思われる。すなわち、図1中のカテゴリーのIIとIIIに顕著な違いが見られることが予想される。

#### 4. 研究方法

調査対象は、カザフ民族大学で日本語を専攻とする1年生から4年生までの学生83名を対象<sup>8</sup>とし、調査時期は、2008年5月である。

調査紙は、木谷(1999)を使用した。木谷(1999)ではHorwitzとCotterallの調査で使われた2つのアンケート調査項目を融合させ、45の質問項目に作り直しが行われている。使用言語は木谷(1999)においては英語であったが、本研究ではロシア語に翻訳をしたものを用いた<sup>9</sup>。表2のI~Vのような5つのカテゴリーに分かれているが、調査紙にはカテゴリーは示さず、45番までの通し番号で構成した。回答方法は4件法(強く賛成する、賛成する、反対する、強く反対する)であった。

木谷(1999)では、「強く賛成する」と「賛成する」を選択したものを含ませ、「賛成派」とし、パーセンテージで表

し分析を行っている。この方法は、「強く賛成する」と「賛成する」を別項目として立てた意義が薄れると思われる。そこで本研究は、「強く賛成する：4」、「賛成する：3」、「反対する：2」、「強く反対する：1」、「無効回答：0」とし、平均と標準偏差を算出し、分析を行うこととする。

#### 5. 結果と考察

##### 5.1 結果

前述のような方法で調査を行った結果は、以下の表2のようになった。数値については、参考資料に付した。

表2中のグラフを見ると、カザフスタンとロシアの数値がほぼ同じであることがうかがえる。特に、カテゴリーII、III、Vについては、全体的にカザフスタンがロシアに比べ、数値が高いという傾向があるものの、両国の数値がほぼ同じで、グラフ上でぴったりと重なるものとなった。

表2 カザフスタンおよびロシアの日本語学習者の外国語学習観

〈グラフ凡例〉

カザフスタン：●+太線

ロシア：■+細線

<p>I 教師の役割に関する信念</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 外国語学習に成功するにはいい教師が必要である。</li> <li>(2) 教師に自分の外国語学習上の問題点や困難な点を教えてほしい。</li> <li>(3) 教師による定期的な試験は学習者にとって助けとなる。</li> <li>(4) 教師に自分がどのくらい外国語学習が進んだか教えてほしい。</li> <li>(5) 教師に学習到達目標を設定してもらいたい。</li> <li>(6) 教師にどのように外国語学習を進めるべきか教えてほしい。</li> <li>(7) 教師が学習者を一所懸命学習させなければならない。</li> <li>(8) 教師は常になぜ教室でこのような活動をするのか、その目的や理由を学習者に説明しなければならない。</li> <li>(9) 教師に個々の学習活動にどのくらい時間を使えばいいのか教えてほしい。</li> </ol>
<p>II 学習者の自律性に関する信念</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 自分の外国語学習のどの部分を改善すべきかわかっている。</li> <li>(2) 自分で新しいことに挑戦するのが好きだ。</li> <li>(3) 外国語を学習するとき、教師に助言を求めるのが好きだ。</li> <li>(4) 自分自身で問題の解決を見つけるのが好きだ。</li> <li>(5) 自分がどの程度学習できたかを自分でチェックする方法がある。</li> <li>(6) 自分の間違いを自分でチェックするとき、一番学習できる。</li> <li>(7) 自分の外国語習得を阻害するものについて教師と話す。</li> <li>(8) 私は外国語をどう学習すればいいかよく知っている。</li> </ol>

<p>III 言語学習の適正に関する信念</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 外国語学習について特別の才能をもっている人がある。</li> <li>(2) 何か一つ外国語を話せる人にとって外国語学習はより易しい。</li> <li>(3) 私の国の人々は外国語学習が得意である。</li> <li>(4) 外国語学習は大人より子供の方が易しい。</li> <li>(5) すべての人が外国語を話すことを習得できる。</li> <li>(6) 私はいろいろな教室活動にうまく参加することができる。</li> <li>(7) 私は過去に外国語学習に成功した経験がある。</li> <li>(8) 私は外国語学習について特別な才能を持っている。</li> <li>(9) 私は他の人と外国語を話すことに対して不安を感じ、臆病になることがある。</li> <li>(10) 私はクラスの中で子供になったように感じたことがある。</li> <li>(11) 数学や科学が得意な人は外国語学習は得意ではない。</li> <li>(12) 女性は男性より外国語学習が得意である。</li> </ol>
<p>IV 言語学習の本質に関する信念</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 外国語学習はその外国語が話されている国で行うのが一番いい。</li> <li>(2) 外国語をうまく話すためには、その文化を知ることが必要だ。</li> <li>(3) 外国語学習の方法は他の分野の学習とは異なる。</li> <li>(4) 他の外国語よりも学習しやすい外国語がある。</li> <li>(5) 外国語学習の中で一番重要なのは、文法の学習である。</li> <li>(6) 外国語学習の中で一番重要なのは、翻訳の学習である。</li> <li>(7) 外国語学習の中で一番重要なのは、語彙の学習である。</li> <li>(8) 外国語学習の中で一番重要なのは、きれいな発音で話すことである。</li> <li>(9) 外国語を話すより読んだり書いたりする方が易しい。</li> <li>(10) 外国語を学習し始めた初期の段階で誤りを正しく訂正しなければ、誤りが残ってしまい、後で訂正するのは難しくなる。</li> <li>(11) 外国語を聞いて理解するよりも話す方が易しい。</li> <li>(12) 外国語を学習するとき、正しく話せるようになるまで外国語を話すべきではないと思う。</li> </ol>
<p>V 言語学習の動機に関する信念</p>		<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 私は日本人の友人を作りたい。</li> <li>(2) 日本語が話せれば、いい就職のチャンスがある。</li> <li>(3) 私は日本のことをもっと知りたいので、日本語を学習している。</li> <li>(4) 私は自分の国の多くの人が日本語や日本文化を知ることが重要だと思っている。</li> </ol>

## 5.2 考察

### 5.2.1 教師依存型の傾向

注目すべき点は、「I 教師の役割に関する信念」は全体に数値が高い<sup>10</sup>。カテゴリーIの質問文9つは「教師に…してほしい」といった教師依存とも考えられるものや、「教師は…しなければならない」など教師の役割を規定するもので占められる。これは、教師依存型であることを示唆するものではないか。瀬尾(2008)は日本の中学生2,304名とその数学担当教師22名を対象に質問紙調査を実施し、階層線形モデル(HLM)による分析を行った。その結果、教師主導型指導と依存的援助要請との間に有意な関連が示された。教師主導型指導とは、「教師の説明が中心で、思考活動を教師が肩代わりするタイプの指導」である。カザフスタンとロシアの日本語学習者がこの教師依存型であるとすれば、両国の教師が教師主導型指導を行っていることが推測され

る。両国の教育制度はソビエト崩壊の1991年までは共通であった。さらに、どのような指導方針であったかを客観的に示す文書(指導要領)を根拠とすべきであるが、筆者がカザフ民族大学で日本語教師研修を行った際には、新任教師たちはコミュニケーション活動や学習者主体の活動の具体的方法を知らない者が少なくなかった。一方、国際交流基金は、ノンネイティブ日本語教師のための研究を埼玉県日本語研修センターで実施しており、そこですでに研究を受けた教師は学習者主体の活動を知っていた。また、日本語弁論大会の指導においても、学習者は「大学にはいるまで自分の意見を大勢の前で発表するという機会がなかった」と口をそろえ、意見文そのものの書き方から指導する必要があった。

そして、これを鑑みると、「II 学習者の自律性に関する信念」は全体に低い平均値となっている。しかし、カザフ

スタンとロシアが教師主導型指導であると断言できるほどの差であるかどうかは、今後、t検定を用いるなどし、関連を調べる必要があるだろう。

以上のことから、カザフスタンとロシアで共通するのは教師への期待が比較的大きく、教師主導型指導の傾向があることが考えられる。

### 5.2.2 両国で大きな差が見られた項目

本研究の出発点はカザフスタンの二言語併用国家という特質であった。すでに第二言語習得に成功しているカザフスタンの学習者が「Ⅲ 言語学習の適正についての信念」でロシアと異なる結果が出ることを予想したが、目立った違いは現れなかった。

ただ、(10)の「外国語を学習し始めた初期の段階で誤りを正しく訂正しなければ、誤りが残ってしまい、後で訂正するのは難しくなる」と(12)「外国語を学習するとき、正しく話せるようになるまで外国語を話すべきではないと思う」という訂正フィードバックと正確さ志向についての質問についてのみ、大きくロシアと差をつけ高い数値であった。これは何を意味するのであろうか。この点を明らかにするには、数値のみでは測れないため、カザフスタン人の第二言語習得(ロシア語ないしカザフ語)の経験をインタビューするなりし、検討するほかないだろう。

## 6. まとめと今後の課題

本研究では、「Ⅰ 教師の役割に関する信念」は全体的に数値が高く、「Ⅱ 学習者の自律性に関する信念」は反対に低いことから、カザフスタンとロシアの大学生は自律性よりも教師依存の傾向が明らかになった。その要因として、旧ソビエト方式の教育のありかたに由来する可能性を示した。ロシアを含む CIS 諸国同様、現在、カザフスタンもシュコーラという11年制の中等教育制度が実施されている。現段階ではシュコーラの指導内容や方針などを調べていないが、この点が共通すれば、今回のロシアとの類似が説明できるだろう。

また、本研究の出発点はカザフスタンの二言語併用国家という特質であった。すでに第二言語習得に成功しているカザフスタンの日本語学習者が「Ⅲ 言語学習の適正についての信念」でロシアと異なる結果が出ることを予想したが、目立った傾向は現れなかった。このことから、フィリピンなど二言語併用国家の学習者で同じ質問紙を利用し調査を行い、明らかにする必要がある。

さらなる今後の課題として、対象者の補充である。今回はカザフ民族大学の学習者を対象に調査を行ったが、人数を増やすことである。83名でカザフスタンの大学生の言語

学習観を測定するのはやや困難であった。ただ、日本語主専攻の大学生自体が多くないカザフスタンでは、この人数は比較的まとまったほうであるとも言えることを申し添えたい。

現在、カザフスタンを対象とした日本語教育研究は非常に少ない。それは、カザフスタンの日本語教育の歴史はまだ16年と浅いためであるが、カザフスタンの日本語学習者が1,000名を超えた今、現状を報告したものや、日本語同様膠着語であるカザフ語母語話者の日本語習得の様相を記述した研究の必要性はいうまでもない。ロシアのみならず、CIS 諸国に日本語学習者が着実に増加していることは自明のことであるので、今後こうした研究の発展が急がれる。

## 7. 参考文献

- (1) 荒川友幸・和栗夏美 (2007) 「カザフスタンにおける日本語初級カリキュラム—日本人材開発センターの新しい試み—」『国際交流基金日本語教育紀要』3号、123-133
- (2) 片桐準二(2005) 「フィリピンにおける日本語学習者の言語学習 Beliefs—フィリピン大学日本語受講生調査から—」『国際交流基金日本語教育紀要』1号、85-101
- (3) 木谷直之(1999) 「極東ロシアの大学生の言語学習観について—海外日本語教師研修のための基礎データ作成を考える—」『日本語国際センター紀要』8号、95-109
- (4) 久木元恵(2008) 「カザフスタンの大学日本語教育の課題と取り組み」『現代中央アジア研究会ニュース』5号、1-3
- (5) 小柳かおる(2004) 『日本語教師のための新しい言語習得概論』、スリーエーネットワーク
- (6) 柴田俊造 (1991) 「東欧諸国の日本語教育」『講座日本語と日本語教育15—日本語教育の歴史—』明治書院、303-308
- (7) 瀬尾美紀子(2008) 「学習上の援助要請における教師の役割—指導スタイルとサポート的態度に着目した検討—」『教育心理学研究』、第56巻第2号、243-255
- (8) 福島青史・マリナー=イヴァノヴァ (2006) 「孤立環境における日本語教育の社会的文脈化の試み—ウズベキスタン・日本人材開発センターを例として—」『国際交流基金日本語教育紀要』2号、49-64
- (9) 外務省「カザフスタン共和国」(2008年12月現在)  
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/kazakhstan/index.html>
- (10) 国際交流基金「日本教育国別情報」(2008年12月現在)  
<http://www.jpfi.go.jp/japanese/survey/country/2006/kazakhstan.html>

## 8. 参考資料

(a) カザフスタンおよびロシアの調査結果：平均値／標準偏差

表1 教師の役割に関する信念

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	全体
カザフスタン	平均	3.8	3.4	3.3	3.8	3.6	3.5	2.8	3.3	3.0	3.4
	SD	0.3	0.4	0.4	0.6	0.6	0.6	0.3	0.4	0.4	
ロシア	平均	3.5	3.4	3.3	3.1	2.8	2.9	2.8	2.4	2.3	3.0
	SD	0.6	0.7	0.7	0.7	0.8	0.8	0.9	0.8	0.8	

表2 学習者の自律性に関する信念

		1	2	3	4	5	6	7	8	全体
カザフスタン	平均	3.3	3.2	3.5	3.1	2.6	3.0	2.7	2.6	3.0
	SD	0.7	0.8	0.6	0.7	0.8	0.8	0.8	0.8	
ロシア	平均	3.1	3.0	3.0	2.9	2.6	2.5	2.3	2.4	2.7
	SD	0.7	0.7	0.8	0.7	0.7	0.9	0.8	0.7	

表3 言語学習の適正に関する信念

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全体
カザフスタン	平均	3.4	3.1	2.9	3.1	3.0	2.9	3.1	2.4	2.6	1.8	1.7	2.2	2.5
	SD	0.7	0.8	0.9	0.8	0.9	0.9	0.8	0.9	0.9	1.0	0.9	1.1	
ロシア	平均	3.4	3.3	2.9	3.1	2.9	2.7	2.7	2.5	2.3	2.0	2.0	1.9	2.5
	SD	0.7	0.7	0.7	0.9	0.8	0.7	0.6	0.8	0.9	0.7	0.7	0.7	

表4 言語学習の適正に関する信念

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全体
カザフスタン	平均	3.7	3.5	3.2	3.3	3.1	2.8	3.5	3.1	2.7	3.8	2.6	3.0	3.1
	SD	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9	0.8	0.7	0.9	0.9	0.4	0.8	0.8	
ロシア	平均	3.8	3.4	3.4	3.2	3.0	3.0	3.0	2.7	2.6	2.5	2.3	1.7	2.7
	SD	0.5	0.7	0.7	0.8	0.8	0.7	0.8	0.7	0.8	1.0	0.8	0.7	

表5 言語学習の動機に関する信念

		1	2	3	4	全体
カザフスタン	平均	3.5	3.3	3.2	2.3	3.1
	SD	0.6	0.8	0.8	0.9	
ロシア	平均	3.6	3.5	3.3	2.6	3.2
	SD	0.6	0.6	0.7	0.7	

(b) 露語調査紙 ※調査時は5つのカテゴリーは伏せ、通し番号とした。

1. Для успешного обучения ин.языка необходим хороший преподаватель
2. Хотелось бы чтобы преподаватель рассказал о трудностях с которыми он сталкивался во время изучения ин.языка
3. Регулярное тестирование преподавателей, хорошо отражается и на учащихся
4. Хочу знать о своих продвижениях (в процессе обучения ин.языка)
5. Преподаватель должен устанавливать цель обучения перед студентами
6. Преподаватель должен говорить о том как именно надо продвигать обучение ин.языка
7. Преподаватель должен стимулировать учащихся учиться изо всех сил
8. Преподаватель всегда должен объяснять студентам почему и для чего обучение идет таким или иным образом
9. Хотелось бы чтобы преподаватель говорил о том, сколько времени надо тратить на ту или иную часть в обучении ин.языка
10. Я знаю уровень своих знаний
11. Люблю самостоятельно одолеваять, что-то новое
12. В процессе обучения люблю получать советы от преподавателя
13. Люблю самостоятельно находить ответы на возникшие вопросы
14. У меня есть свой способ проверки знаний(продвижений)
15. Лучше всего получается учиться при самостоятельной работе над ошибками
16. В процессе обучения ин.языка возникают препятствия. Я обсуждаю их с преподавателем
17. Я хорошо знаю как надо учить ин.язык
18. Есть люди обладающие особым талантом в изучении ин.языка
19. Тому кто знает хотябы 1 ин.язык, гораздо легче выучить еще один
20. Люди в моей стране могут с легкостью овладеть любым ин.языком
21. Изучение ин.языка легче дается детям нежели взрослым
22. Все могут овладеть ин.языком
23. Я могу принимать участие на разных предметах
24. В прошлом у меня был успешный опыт изучения ин.языка
25. В плане изучения ин.языка, я особо одаренный человек
26. Разговаривая на ин.языке ощущаю неуверенность
27. Иногда в классе я чувствую себя ребенком
28. Тот, кто хорошо владеет математикой и наукой не сможет выучить ин.язык
29. У девушек процесс обучения ин.языка идет лучше чем у парней
30. Ин.язык лучше изучать в стране где на нем говорят
31. Чтобы хорошо овладеть ин.языком, необходимо знать и его культуру
32. Способ изучения ин.языка отличается от способа обучения других сфер
33. Некоторые ин.языки даются легче чем другие
34. Самое главное в изучении ин.языка, освоение грамматики
35. Самое главное в изучении ин.языка, обучение письменному переводу
36. Самое главное в изучении ин.языка, это пополнение словарного запаса
37. Самое главное в изучении ин.языка, это правильное произношение
38. Легче читать и писать на ин.языке нежели чем говорить
39. Ошибки допускающиеся в начальной стадии обучения нужно исправлять сразу т.к. чем дальше тем труднее будет от них избавиться
40. Разговаривать на японском языке легче, чем слушать японскую речь и пытаться понять
41. Думаю что прежде чем начать говорить на ин.языке, надо научиться правильно разговаривать
42. Хочу завести друзей японцев
43. Владея японским языком, есть шанс хорошо устроиться на работу
44. Я изучаю японский язык, потому что хочу больше узнать о Японии
45. Я думаю, что большинство людей у нас в стране считают, что очень важно знать японский язык и культуру Японии

- 1 仕事や生活上有利なので目標言語を学習するといった  
実用目的達成のための言語使用願望を道具的動機づけ  
(instrumental motivation)、目標言語が用いられる社  
会の一員と見なされるようになりたいという融合・同化  
願望を統合的動機づけ (integrative motivation) と分類  
される (小柳、2004)。
- 2 バイリンガルには継起発達バイリンガル (sequential  
bilingual) と同時発達バイリンガル (simultaneous bilin-  
gual) がある。前者は、一つの言語が先行し、その上に  
二つ目加わる場合である。後者は、二言語に同時に接  
触してバイリンガルになる場合である。たとえば、国際  
結婚の子どもで親から両方の言語を聞いて育った場合は  
これに当たる (小柳、2004)。カザフスタンの場合は、継  
起発達バイリンガル (sequential bilingual) であると考  
えられる。
- 3 カザフ民族大学は、カザフスタン国内では1934年建学  
の最大規模の総合大学である。学生数約16,000名、学部  
数12。国際交流基金は1995年より日本語教育専門家を派  
遣している。
- 4 外務省ホームページ参照
- 5 木谷 (1999) の調査対象大学で2006年から2年間教鞭  
をとった元日本語教育専門家である成田高宏氏 (サハリ  
ン)、森本由佳子氏 (ハバロフスク) に確認をとった (2008  
年11月末)。それによると、「中央アジア系や韓国系移民  
は流出傾向にある。言語については、ロシア語のみで各  
民族の言語を使う場面は見られない」とのことであった。  
したがって、当該地域をモノリンガルが多数を占めると  
みなすこととした。
- 6 国際交流基金 HP より引用
- 7 Horwitz (1987) は、過去の学習経験や文化的背景が学  
習者の言語学習についての信念の形成に大きな影響力を  
持ち、教室活動や授業内容が信念や期待に合致しない場  
合は、学習者は自信や意欲を失い成功は望めないと考え、  
32名の中級レベル学習者に対して、自身が開発した  
Beliefs About Language Learning Inventory を行っ  
た。(木谷、1999に基づく)
- 8 2008年5月時点で、カザフ民族大学東洋学部日本学科  
(日本語主専攻) の学生数は98名であった。調査紙を配  
布し、回答を得られたのが83名であった。回収率は84.7%  
である。
- 9 「8. 参考資料」参照
- 10 カテゴリー I 全体の平均値：カザフスタン3.4、ロシア  
3.0、両国では3.2

## Consideration on Japanese-Language Learner's Beliefs in Kazakhstan : By the comparison with ones in Russia

Megumi KUKIMOTO

This research investigates a background of the beliefs of the Japanese-language learners in the Kazakhstan from a social viewpoint. The focus of this research is L3 Kazakhstani learners of Japanese who have little contact with Japanese-language in their country and don't have instrumental motivation for their learning the language. For comparison, Russian L2 learners of Japanese who have similar motivation for learning the language are also tested. This study used 45 questions. As for the questionnaire survey, BALLI (Beliefs About Language Learning Inventory) was used. BALLI has 5 categories. "(1)About teacher's role", "(2)About the learner's autonomy", "(3)About the aptitude for language learning", "(4)About the essence of language learning" "(5)About the motive of language learning". The Japanese-language learners answered by "strongly agree:4", "agree:3", "disagree:2", "strongly disagree:1". The average and standard deviation was calculated and analyzed.

The results show that both groups have stronger tendencies of dependence on teachers rather than autonomy learning. The influence of the education system of Soviet Union is suggested. Future problems are in the development of a learning method for the beginners that will match in the Kazakhstan situation and conducting a beliefs survey of intermediate-level learners.

At the moment the amount of Japanese language education study is small due to the short history of Japanese-language education in Kazakhstan. However the number of Japanese-language learners in the Kazakhstan exceeded 1,000. Therefore, the research into aspects of the Japanese-language acquisition by the native Kazakh-language speakers is required as never before.